

リレー随想

会費制で結婚式を挙げようと家内と相談して、最初にしたければならないことは、実行委員会をだれかにお願ひすることだった。私と家内は同じ文芸サークルに所属しており、仲間もだいたい同じくらいの年で言いやすかったので、サークルの例会のとき、結婚することの報告と結婚式の手伝いとをお願ひした。仲間の一人が「そういつてくるのを待っていたよ」と拍手してくれた。

編集長のIさんがサークルの代表として、その他にも何人か、いろいろと打ち合わせに参加してくれることとなったが、そこで問題になったのが、大人三千元、子ども五百円と、二人(ほとんど家内)で決めた会費であった。予算的に、この金額で酒を出すのは無理なので、アルコールはなしとした。子どもの会費をも少し上げられないかという話も出たが、これには家内が難色を示した。

家内は自宅で月二回、近所の子どもたちに無料で本を貸し出す、こども文庫という活動をしていた。家内とすれば、文庫の子どもたちには、なるだけ安い会費で大勢に来てもらいたかったのだから(式当日は、二つか

実行委員会

土地家屋調査士

田口 一法さん



三つのテーブルが、子どもたちで占められていたように思う)が、子どもの数が、予算を少しばかり圧迫しているのは間違いなかった。

「最初から金額を決めて、実行委員会を束縛したらいかんよ。会費制というのは、会の運営から少し利益を出して、その利益を、あなたたちへのお祝いにするんだから」

メンバーの中からは、赤字を出したら実行委員会を開く意味

がない、という意見も出たが、私たちが(というよりも家内が)何とかお願ひして、半ば強引に最初に決めた金額で押し切ってしまった。後からは、家内の職場の人も数人、打ち合わせに加わるようになり、何度も何度も同じことを繰り返して、場所は九品寺にある労働会館のホールを確保した。

招待客は三百人近くになり、一度には入りきれないので二回に分けた。子どもたちは二回目の方に招待することとし、ケーキとコーヒーだけで披露宴をやるのと、とりあえずの方向だけは決めることができた。「コーヒーは嫌い」という家内の意見を入れて、紅茶も準備してくれることになった。

三千元の予算の中で引き出物も考えた。仲人が水前寺の方に、「竹とんぼ」という子どもの本の専門店を出していたので(今は西原村に移っている)、そこに頼んで「サンタクロースについているんでしょうか？」(中村妙子・訳、東逸子・絵)という本を取り寄せてもらった。定価は六百円。子ども向けの絵本だが、名著である。

「いい話だなあ」と感心していると、仲人が「発行元である借成社が、好意で結婚記念の金文字を入れてくれることになった」と教えてくれた。思いもかけないことで、ただただ感謝、感謝でした。

(熊本市花園、46歳)